人の氣に向く樣にして、遣れい」

とのことでございまして、そこで先づ名主を首め近所の者が相談をして、漸うのことに旅の支度をいたして遣りました、かの大原眞守の短刀は鎧笹のうちへチャンと納めまして、これを當人の背中に負はせ、脚絆甲掛から子供の穿きます る草鞋まで手當をして遣りまして、一文字の笠を被らせて、手には柄杓を一本持たせ、一寸金刀琵羅詣りと云ふ樣な姿が出來ますと

「マア我等が集めた此の金を路用として遣るから、隨分道中を氣を付けて行け」安之「何うも大きに有難うございます、皆さん方のお蔭で私は思惑の所へ行けますのでございますが、何分お父さんを離れましたる所へ、後々の命日には何うぞマア香華の一つも供げて下さいまする樣、平左「それは何も心配をするな、汝も越後へ行つて立派な武士になつたら、又戻つて來い、乾度此方で吊祭をして遣るから、何分よろしうお賴み申します」と父が殺された其の後に漸う一七日も過ぎまして、安之「何うぞ何分よろしうお賴み申します」

遂に住み馴れたる五仙の驛を跡になして、道中筋を利口な小僧であります、日數重ねまして滯りなく越後の新發田へ乘り込んで參りました、御家中を彼方此方

と尋ねて歩きましたが、一軒の白壁造りの立派なお屋敷、その門前の標札に「中山安左衛門」といたしてございますから、さては此邸であると、ズッと這入つて參りまして、やがて玄關に來りまして、

安之「お賴み申します、一寸お賴み申します」

桃次「どうれ」と桃次に出て參りましたのは若黨の平助、それへ出まして兩手を支へ頭を下げ云ひながらもヒョイと頭を上げて安之の助の姿を見てビックリ驚いた

平助「ヤイ此の野郎、汝は乞食ではないか、飛んでもない圖々しい奴だ、乞食の分際として玄關前に立止まつて賴まうなんて不埒な奴だ、何だ汝は

安之「ハイ、小父さん、そんなに恐い顏をして怒るものぢやアない、久し振でお目に懸りました

平助「默れ、汝の樣な乞食に馴染はないぞ

安之「それでも小父さん、彼の善光寺街道の五仙の驛で、此の間私は此宅のうちの祖父さんに印籠を貰つた者でございます、平助「オヤ圖々しい奴もあるものだなア又印籠かなんか貰はうと思つて來やアがつたな、さう旨くは行かねぞ、モウ去け〳〵

安之「小父さんお前さんは何も知らないが何うぞ祖父さんに然ういつてお呉んなさい、

安之助が參りましたと

ね　平助「甚ろしい又汝は閻々しい奴だね、宅の旦那も何だつて此様な者に育薬を掛けてお遣りなすつたのであらう、小言を呟ひながら奥へ來て　平助「旦那様、此の間善光寺へ御參詣の節に、貴殿は彼あして乞食の小忰に印籠をお遣りなさつたらう　安左「ムウ、それが何うした　平助「その乞食がね野の方途にも道つて來ましたよ、顔むなんて、祖父さんに然ういつてお呉んなさい　安之助が來たと云つて居ます　安左「ホヽウ左様か、ア、參つたか、定めてモウ來るであらうと待つて居つたのだ」　そのまゝ座を起つて安左衛門殿は玄關へお出ましになりまして　安左「オヽ、安之助か、よく參つた……ア、平助汝は塞所へ行つて又助に然ういつて洗足の湯と手拭を持つて來て遣れ、湯が沸いて居らんければ水でも宜い」　早速又助へ此の事を申し入れますと、やがて手水盥に水を汲んで手拭を提げて持つて參りました、見ると此の間善光寺道で出會つた乞食でございますから、變な顔をいたして居りますと　安左「又助、その者の草鞋の紐を解いて足を丁寧に洗つて遣れ　又助「旦那様、冗談ぢやございませんねね、何ぼ中間でも私は是れから出世をする身体です、乞食の足洗ひとは酷

いぢやアございませんか　安左「ヨテ〳〵　呟ふな、洗つて遣れつてば、又助「ヘエ〳〵」　口小言を呟ひながらも草鞋の紐を解いて足を洗つて遣つて居ります　安之「小父さん其の指の股の處もよく洗つて置いておくんな　又助「何を云やアがるんだ　安左「こりや〳〵　そんなに酷く取扱ふな」　漸う足が洗へますと　安左「さア此方へ來れ」　と安之の助を伴ひ老人は奥の一室へ退入つて參りました　安左「よく參つたね　安之「祖父さん、此の間は結構な品を頂きまして有難うございます　安左「ムウ、して親父は吾等が申し付けて置いた通り菩提所へ參つて切腹をいたしたか　安之「あのね貴殿から頂きました印籠を彼の日の夕景に開けましたら中からお金子がドッサリ出ました　安左「ムウ、それは拙者が入れて置いて遣つたのだ　安之「そのお金子の勘定をいたしまして、新發田へ伴れて行つて立派な武士にして遣る、おれは阿母様にお話びをすると、斯ういつてお藥を服んでお休みなすつたのでございます、すると其の夜泥棒が忍んで參りまして、遂にお父さんを殺して了ひました　安左「エヽ、いゝ……何だと、泥棒が殺した　安之「ハイ　安左「アヽ、一情ない奴だな、武藏も一通り仕込んで置いて遣つたものを、て

れといふのも親に不孝を働いたる、彼れが天罰を蒙つたのである、汝は何うして居つた 安之「私はね酔を發てたら殺されると思ひましたので、脇の方でヤッと樣子を伺つて居りますと、そのうちに泥棒は庭へ降りて肩の明りに透かして金子の勘定をして居りました、それから此の藥笈に入つてございいますお父さんの脇差の刀身で、一生懸命に脇腹を突いて遣りましたら、そんなり七轉八倒して死んで了ひました 安左「何、泥棒を突き殺めた、ムウ流石は拙者の孫だ、よくいたした 安之「するとね、御檢屍を願ひましたら村雲喜助といふ悪黨でございました、幾つ首があつても足りないといふ奴でございますから、遂に上でお取棄てになりました、私は該地の百姓家へ貰はれて參りましたが、何うぞ越後の新發田へ行つて武士になりたいと願みまして、漸う驛内の人から此の通り着物又は路用までも頂きまして漸う此町へ參りましたのでございます 安左「左樣か、ア、ヽよく參つて呉れた、必ずら汝は一人前の武家にして遣るぞ」と頭を撫でつ摩りつして安左衛門殿は非常に喜んでおいで在ばす、唐紙一室へ向ふで先刻からヤッと樣子を竹鋸きを致して居りました、彼の若黨の平助

ですが、何で彼れなる乞食に御樣に親しく遊ばすのであらうと仔聞きをして見ると、當家の孫といふことが分りましたから、大きに驚きまして早々臺所へ遣つて來まして 平助「オイ又助、いまお前が玄關前で足を洗つて遣つた小僧ね 又助「ムウ 平助「あれを全体何者だと思ふ 又助「何と思ふつて、善光寺の街道で印籠を盜みやアがつた小僧ちやないか 平助「さうよ、ヤアあれは大變な者だ 又助「ムウ、何だ 平助「あれはね孫て宅の旦那がお話をなすつた、何でも此所十ヶ年はも前に此處の屋敷を家出をなすつたといふ當家には御子息があつたんだ、又助「それは聞いて居る 平助「その御子息のお子樣で、宅の旦那のためには孫に當るお方だ 又助「ヘエ、あれが 平助「さうよ、尤も彼のときに飛度便つて來いと居しやつたものと見えて、それで今日あゝして來らつしやつたのだ、そこで既めてチャンとお名乘りが濟んで、あの坊樣が今日から當家の跡目相續をなさるお方だ 又助「さうか、それで宅の旦那があんなに丁寧になすつたんだな 平助「さうよ、けれども 又助、瓜の蔓に茄子は結らぬとは能く譬つたものだね、旦那がなァ、斯うやつて名乘りをする以上は最早や其の方は當家の相續人で

あるぞ、マア左様に思へと、云つて聞かしてお遣りなさるとね、それでは何でございますか當家に居りまする者は皆私の家來でございますかと、斯ういつてね彼の坊ちが云つてらつしやつた又助「ムウ、平助「すると宅の旦那が、如何にも然うだ其の方のためには皆家來であると云つてらつしやるとね、それでは一寸祖父様に伺ひますが、今玄關前で私の足を洗ひました奴は彼れは何と申します、斯ういつて聞いて居るんだ又助「ムウ、平助「すると旦那が、あれは此の屋敷に長らく勤めて居る馬鹿の又助といふ者だと……又助「何だと、馬鹿の又助だ、ひどいねえ平助「すると彼の坊ちがね、何うも私は祖父様彼奴は不埒な奴の様に心得ます、五仙の肆で如何に知らぬとは云ひながらも、貴爺のお印籠を持つて立去らうとしたときに、彼奴が第一番に駈けて參りまして私をボカ〳〵打ちましてございます、家來の分際といたして主人を打つとといふのは甚だ以て不埒でございます何うぞ私が當家の跡を相續いたしまするなれば、あの又助を私に下し置かれまする様、かう云つて居るんだ又助「ヘエー、それから何うしたんだ平助「すると旦那が、ムウ其の方に遣はすが何うする、左様

でございます彼れを縛めまして此の庭前へ繋いで置いて、一寸刻し五分居しに斯つて來てます、斯ういふと旦那が、ムウ來い其の様な氣象でないと此の方の屋敷の跡目相續は出來ぬ、然らば今これへ又へ助を呼んで縛めて遣るぞ、思ふ存分に斬れと云つてね、旦那さまと彼の坊ちが相談をして居るんだ又助「オイ〳〵、ヲヽ冗談ぢやアない我れは何も當家のお孫様といふことは知らないのだ、そんな馬鹿なことがあるものかい」真蒼に相成つて慄へ出しました安左「平助や、又助を伴れて是れへ參れ平助「ソーヲ彼の通り呼んで居らつしやるぞ、又公朋友の好みだ、何なりとも遺言でもあるなら仕て置け、氣の精か大變お前の影が淡くなつたぞ又助「冗談ぢやない也、オイ何うかお前共々に奥へ行つて頼んで呉んな」とか〳〵慄へ出しましたが、早々奥へ恐々ながら遣つて參りました安左「さア皆此方へ何うぞ這入つて呉れ又助「ヘエ、旦那様何うか生命ばかりはお助けなすつて、一向私は何事も存じません致しましたのでございますから、安左「何うした又助又助「何うも斯うもございません、生命ばかりはお助けを願ひます安左「何を云つて居るのだ、脊後の方で平助はコ〳〵

笑ひ出しました　平助「旦那様、この野郎を懲かし付けて遣つたのでございます　安左「そんな悪戯をするな……決して手前を何う斯うとは云はねぞ　又助「ヤイ平助、愛にて居ろ此畜生　我れは恐よ生命を殺られるか知らんと思つたんだ　安左「さて其の方共一同に申し聞かすが、拙者の悴は十ヶ年以前に家出をいたして、その者が遺胤の是れなる小兒、過日善光寺へ参詣をいたした節親孫の名乗りをいたして、我が屋敷へ便つて参つたことである、この者に對して跡目をは相續させるのである、何うぞ汝等は其の積りで大切にいたして遣つて呉れ　一同「何うも旦那様お目出度うさせでございます　安左「そこで平助汝は城下へ参つて、此兒が身に大抵適ひさうなといふ着類または子供の袴といふ樣な物を調へて貰ひたい、舍弟の菅野を一寸呼んで貰ひたい」直に隣家に住居をして居らつしやいまする、菅野六郎右衛門といふ者をお召しに相成りました、これは當時溝口家において關口流の指南をいたしておいでになります、本來中山安左衛門殿の御舍弟でございまして、御幼少の砌り菅野の家へ御養子においでになりつたお方でございます、中山安太郎のためには叔父さんでございます、

それを態々お呼び寄せに相成りまして、安太郎の遺子安之助を菅野も之れを承はり孫のお紹介に相成つて万事お話になりますと、外のお悦びでございます、そこで孫とは云はず是れなる安之助を我が子といふことに遊ばして、まづ表向き上へは養子といふ披露をいたして、改めて安兵衛と名前をお付けになりました、安兵衛さんといふと何だか斯う年寄じみた名前でございますが、まだ漸う九歳の小兒でございます、中山の姓を名乗り中山安兵衛で此の家の跡目相續をするといふことに相成つて、万事後見には菅野六郎右衛門が付き從ひまして、これから一通りの教育をいたしましたが、丁度その十四歳の年まで中山安左衛門の御老体も御存命でございました、老後のことゝて僅かの病氣からお果てに相成りましたることにて、跡は甚だなく安兵衛に下し置かれるといふことに相成りました、至つて筋骨逞しく大兵の質でございまして、まづ十四歳の頃はひから菅野先生の道場に通ひ、一心に劍道を學ぶといふことに相成りました が既に安兵衛年齢十九歳に至りましては、モウ關口流の極意皆傳を受けるといふことに相成りまして、却て菅野六郎右衛門から見ると

安兵衛の方が遙かに腕が優つて居りまする位でございまして、殊に身の丈六尺近うもあつて、御家中では先づ一二を爭ふといふ腕前の御仁となられましたが、人には必らず一つの癖のあるもので、此の人は女の中へ放倒して置いても、決して婦人に目を着けるといふ樣なお方ではございませんが、酒といふ場所に參りますとモウ堪りません、たゞモウ何程でも飲みたいといふのが病癖でございまして、その酒にも又いろ〳〵の上戸がございますが、中山安兵衛はへげた上戸といふのでございまして、二升でも三升でも飲りつけますと其の場で酔ひ倒れてお了ひなすつて、道路であらうが玄關前であらうが構はずに打倒れて寢て了ふといふ、度を過して酒を飲みますとサッパリ身体の行狀が崩れて了ひまして、他愛のない有樣でございます、よつて菅野の老人も非常に之れをば御心配をなすつて「必らず慎しまんけんばならないのは酒である、お前は劍道も相當に出來、一隨分素面では家中の者も用ひるが、酒を飲むといふと他愛がない、何うぞ酒は慎しんで貰れる樣」と度々の御異見でございますが、酒屋の門でも通ると、自分は我慢を仕やうとしても腹の虫が得心そし

ないといふ、大の飲酒家でございまして、度々酒で過失ることもございます、ところが丁度其の翌年のことでございました、この新發田の主家に一つの騒動が出來ました、といふのは、溝口伯耆守の御前一人の妾の色香に狂ひたまひ、晝夜姪酒にのみお耽りに相成りまして、お國許の政事は些しもお構ひなく、侯姦の曲者を手許に集めて放蕩を盡したまふといふ、この新發田の下流の豐かういふ上流を習ふ樣にてお國の塵を拂はうといふ、俗に朝間に等しきところの曲者連中は殿に媚び諂ひをいたします、よつて忠臣の鉾々は大きに屆を繫めまして、折々君のお目通りへ出て御異見を申し上げまする、さて此の異見といふものは六ケ敷いものでございまして「金言は耳に逆ひ良藥は口に苦し」といふ譬へのごとく、徳川家康公が條目のうちにもお殘しなすつた通り「心なき君に諫言をするは戰場にて一番槍を入れるよりも尚ほ難し」とございます、成るほど其の通りでございまして、戰場で一番槍を入れますれば、其の身は討死をする代りに其の子孫に必らず相當の御加增を賜はつて、予がたりを

思ひ馬前に討死をいたして呉れたといふので、名前なりとも殘りさす、御主君に心得違ひがあるから夫れを矯め正さうと思うて異見を仕まする、すると其の主人で見れば自己の氣に入らぬことを云はれるから、遂には癇癪を發して、不埒な奴だと手討に及んで了ひます、さうすれば其の忠臣は扱で殿が氣が付いて可哀相なことを仕たと加増を申し付けるかといふと、決して然うではありません、知行取上げの上、家族は追放といふ樣なことになるのが、十中の八九分通りは然ういふ形でございます、だから餘はど此の諫言といふものは難しいと、云つて之れをば捨て置けば、何處までも放蕩が募るといふ樣なことで、まして菅野六郎右衛門殿は撃劍の指南ばかりではない當家の傍役でもあつて、殊に人に物を教育しやうといふお方でございますから、度々出仕をいたして滿口の御前に諫言をいたしましたが、殿には蒼蠅く思し召して目通りを遠ざけてお了ひなすつた、すると菅野に反對黨の輩は、斯ういふ機を幸ひとして種々樣々に殿へ讒言を構へました、そこで遂に知行を取上げの上、永のお暇といふことを仰せ渡されに相成りました、殿より斯るお使者を賜はると菅

野はホッと嘆息をいたし「アヽ情ないことである、われ君の爲めを思ひ御諫言を申し上げたが、却て夫れが越度となつて、我れの身の上も維に谷まつたり、最早や斯く相成れば仕方がない、さりながら二君へ仕へる望みもなし、今より江戸表へでも出でゝ、われ一生浪人で身を終らう」といふ決心を定め、早速この儀をお請けに及びましたが、三日の猶豫を下されまして、屋敷を引拂ひ當所を出立いたせといふのでございます、そこで中山安兵衛を呼びにお遣り遊ばして六郎「さて安兵衛、私は此の度君からお永暇が出たのだ、何うも致し方がないから一先江戸へ罷り出で町家住居をいたして、浪人家業に道場でも出して生涯を送らうと思ふ、よつてお前は此の地に足を留め何うぞ君に忠義を盡して呉れる樣」と段々と申し聞かせましたところが中々安兵衛は承知をしません、安兵「叔父上、私は厭やでございます、貴殿はどの忠臣のお方が諫言をして、それがために貴殿がお永暇になるといふ樣な馬鹿なことがありますか、左樣な譯の分らぬ目の明かぬ主人に仕へて居たところが何の功も立ちません、君君々たらずんば臣々たらずの例ひで、貴殿が御浪人なされば私も浪人

しませう　六郎「お前は別にお咎めはうせお咎めがあるに違ひない、……安兵「イヤ〳〵晩かれ早かれ何から、マアよしお咎めが無いに菅野の親族といふことは分つて居る悪ひ、關口流を相當に御教育にしたところが、私も貴殿の御流名を ることであります、最早や御免許を受けて居たしたいと思ひますから、これから他流に渡つて暫くの間武術の修業もいどまでに知前が思ふなら、私は當國を退散いたしませう　六郎「それは奥々もお前に云つて置くが、强ひて云つて止めはせぬ、併し安兵衛のない人だ、色情の道で過失ることはないが、酒といふ方はお前は情ない彼ア云ふへげたれ酒である、をぢが一生の願みだ、何ぞ酒だけは慎しんで呉れなければならぬぞ　安兵「ヤッようございます、その過のところは屹度慎しみます、私は鬼も角も四五年武術の修業をいたし、行々は江戸表へ出まして、屹度をぢ上貴殿の御先途は見屆けまするようでございます　六郎「何うぞ然うして呉れる樣、只今のところでは江戸で何れといふ定めたる場所もないが、多分町道場を開いて彼の地に住居をするから」　茲に菅野六郎右衛門殿は中山安兵衛

に呉々も意見を遊ばして、さて其の身は三日のうちに屋敷を綺麗に明け渡して了ひ、多くの門人に別れを告げて、されば江戸表へ對して出ましといふことに相成りました、後に四谷塩町といへる所に道場を拵へて、こゝに永住をなさるといふことに相定まりましたが、さて中山安兵衛の方は何うかといふと、これは別に殿かちお暇が出たといふのではございません、併し彼れは屋敷へ歸つて用人若黨小者をはじめ皆の者には、そこ〳〵に手當をしてお遣り遊ばし、暇を出して了つて、その身は遂に住み馴れましたる越後の新發田を跡になし、さて東方奥州路を志指して參らうと、若年ながら身の丈は抜群殊に中山家に傳はりましたる、刀身は三尺に等しい關孫六三本杉、小刀は彼の父の遺物の大原眞守、これを横佩へに及んで、十分路用の手當をいたして國を出でましたのは二十歳の年でございます、それより兩三年は奥前界隈彼方此方を廻つて居りましたが、廻り歴つて上州高崎の在に當る、聞庭といへる處へ乗り込んで參つて、その頃有名な樋口十郎左衛門先生の道場に來つて、滿三ヶ年の間に間庭念流の極意に渡りましたが、僅かなところを酒で失策つて、いよ

〈江戸表へ乗り出して参つて、間もなく八丁堀に浪宅を構へ住居をいたすことになりましたが、人呼んで此の人のことを、暴飲家の喧嘩屋の安兵衛、頗情の安兵衛、放蕩の有條を盡し、一圖らずも綽名をされましたほどに安兵衛と綽名をされましたほどにすぐに面會をいたしまするといふ講談から、些細な口論よりをぢなる菅野六郎右衛門殿は、遂に村上兄弟の又にかゝつて高田の馬場の露と消ひにしを、この暴飲家喧嘩安放蕩漢と綽名を取つたる中山安兵衛が、後れながら此の場所へ駈けつけて來りまして、中津川勇範師弟十八名をぢ上の仇村上兄弟をはじめ、

といふものを斬つて落すといふ、この仇討ちが一つの縁となつて、

〈浅野家の留守居役堀部彌兵衛金丸の許へ養子と相成つて、

いよ〳〵堀部安兵衛と姓を改めまして、浅野内匠頭殿に仕へ抜群の誠忠を顯はし、なほ主家顛覆の後には大勢に優れたる間者の働きをいたすといふ、安兵衛の至極誠忠のお物語りから、いろ〳〵入り組んだる間者奇談もありますが、何を申すにも紙數に限りがございますので、本篇は茲に以ちましてお預かりといたします、引續きまして第六篇を

「堀部安兵衛」と表題を下しまして、委しく此の者の履歴を伺ひ

ますことに仕つります、よつて次篇の出づるを待つて、諸君相變らせなう御愛讀あらんことを、茲に今より願ひ置きまする。

講談義士傳

大高源吾（終）

神田伯龍講談義士傳第五編

明治三十六年十月廿二日印刷

柏圭堂
原文藏
復製不許

明治三十六年十月二十六日發行

{講談義士傳大高源吾與附}

講演者　神田伯龍

發行者　大阪市南區北炭屋町百七十番邸　柏原政次郎

印刷者　大阪市南區末吉橋通四丁目十六番地　井下幸三郎

發賣者　大阪市南區御池橋東詰南へ入　柏原圭文堂

同　大阪市南區西濱水町佐野橋東へ入　大阪用達合資會社　脇田愛之助

同　大阪市西區御池橋西詰一丁西辻北入　田中文泉堂

同　京都三條通寺町西へ入　山中勘次郎

柏原圭文堂講談小說文庫目錄

[illegible]

同　[illegible]　大石良雄

柏原圭文堂講談小說發行書目

神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 桶狹間合戰
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 美濃合戰
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 姉川大合戰
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 武田攻眞田の智謀
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 金龍繩張大問答
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 山崎大合戰
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 賤ヶ嶽大合戰
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 四國征伐
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 九州征伐
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 九州征伐薩摩攻
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 小田原征伐
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 朝鮮征伐
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 同後編
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 關ヶ一軍記
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談東國漫遊 水戸黃門實記
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 水戸黃門實記後編
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談西國漫遊 水戸黃門實記
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談太閤記 水戸黃門實記後編
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談諸國奇談 水戸黃門實記
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談 講談義士傳
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談義士傳 天野屋利兵衛
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談義士傳 吉田忠左衛門
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談義士傳 岡島八十右衛門
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談義士傳 大高源吾
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談義士傳 堀部安兵衛
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談義士傳 武林唯七
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談義士傳 赤垣源藏
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談義士傳 神崎與五郎
神田伯龍口演 丸山平次郎速記	講談義士傳 大石良雄

神田伯龍講談義士傳第五編

柏原圭文堂藏
復製不許

明治三十六年十月廿二日 印刷
明治三十六年十月二十六日 發行

（講談義士傳大高源吾與附）

講演者 神田伯龍
大阪市南區北炭屋町百七十番邸
發行者 柏原政次郎
大阪市南區末吉橋通四丁目十六番地
印刷者 井下幸三郎
大阪市南區道頓堀東詰南へ入
發賣者 柏原圭文堂
大阪市南區西濱水町佐野橋東へ入
同 大阪用達合資會社 脇田愛之助
同 大阪市西區御池橋西詰一丁西辻北入 田中文泉堂
同 京都三條通寺町西へ入 山中勘次郎

柏原走文堂講談小説發行書目

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 天下豪傑 **梁川庄八**

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 **梁川義勇傳**

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 仙臺豪傑 **齋藤外記**

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 敵討 **肥後の駒下駄**

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 肥後豪傑 **月岡武勇傳**

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 水戸仇討 **淺田武勇傳**

旭堂南陵口演 山田都一郎速記 天下劍客 **樋口武勇傳**

石川一口口演 丸山平次郎速記 **宮本左門之助**

玉田玉鱗口演 山田都一郎速記 **明烏十勇士**

玉田玉鱗口演 山田都一郎速記 明烏後編 **最上大評定**

玉田玉鱗口演 山田都一郎速記 **菅原天神記**

玉田玉鱗口演 山田都一郎速記 **天滿宮靈驗記**

旭堂小南陵口演 山田都一郎速記 **德川將軍御前試合**

一立齋文車口演 加藤由太郎速記 元祿實我 **龜山大仇討**

玉田玉鱗口演 山田都一郎速記 **講談安倍晴明**

玉田玉鱗口演 山田都一郎速記 大江山鬼賊 **蘆屋道滿**

旭堂南陵口演 山田都一郎速記 大久保美談 **一心太助**

仲居士著 尾竹國一畫 軍人小說 **岸本中尉**

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 俠客仇討 **鬼の清次**

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 貞婦敵討 **戸田花子**

石川一口口演 丸山平次郎速記 德川臣動 **柳澤美濃守**

石川一口口演 丸山平次郎速記 **お半長右衛門**

石川一口口演 丸山平次郎速記 天保水滸傳 **勢力富五郎**

石川一口口演 丸山平次郎速記 天保水滸傳 **須崎政五郎**

松月堂吞龍口演 丸山平次郎速記 寬政奇談 **毒婦大蛇お六**

石川一口口演 丸山平次郎速記 五人白浪 **業平小僧**

谷軒外史著作 鈴木鈴泉氏畫 探偵實話 **意恨の短銃**

柳瀨子鶴作 鈴野春亭氏畫 **己が罪**

山崎學書口演 山田都一郎速記 探偵實話 **獄中の毒殺**

尾崎東湖口演 山田都一郎速記 探偵實話 **深窓の犯罪**

神田伯龍講演
丸山平次郎速記

講談義士傳 正編 全部十冊

㊀菊判形毎冊、紙數貳百頁已上 ㊁木版手摺極彩色口繪入 ㊂毎一冊正價金貳拾錢宛 ㊃郵稅金六錢 ㊄切手代用一割引

○鍋井能登守の事
○田湖外記忠義の條
○吉良上野强慾非道の條
○岡部美濃守の事
○加藤遠江守好意の條
○淺野内匠守松の間御廊下にて及傷の條
○神崎與五郎の傳 上
○堀部安兵衛主君へ暇乞の條
○武林唯七の母殉死の條
○菅野三平の傳

義士傳第二編 **天野屋利兵衛**

○赤穗城へ早打到着
○赤穗城内一家中大評定の事
○同撰り評定
○不破數右衛門の傳
○菅谷半之亟の傳
○天野屋利兵衛の傳

義士傳第三編 **吉田忠左衛門**

○吉田忠左衛門の傳
○寺坂吉右衛門の傳
○杉呼十平次の傳
○俵星玄蕃武勇傳

義士傳第四編 **岡島八十右衛門**

○岡島八十右衛門の傳○岡島下郎直助忠義の條
○千馬三郎兵衛の傳○岡野金右衛門の傳

[illegible]

講談義士傳初編

○[illegible]井能登守の事
○田湖外記忠義の條
○吉良上野强慾非道の條
○岡部美濃守の事
○加藤遠江守奸意の條
○淺野内匠守松の間御廊下にて刃傷の條
○神崎與五郎の傳　上
○堀部安兵衛主君へ暇乞の條
○武林唯七の母殉死の條
○荻野三平の傳

義士傳第二編　天野屋利兵衛

○赤穂城へ早打到着
○赤穂城内一家中大評定の事
○同撰り評定
○不破數右衛門の傳
○菅谷半之丞の傳
○天野屋利兵衛の傳

義士傳第三編　吉田忠左衛門

○吉田忠左衛門の傳
○寺坂吉右衛門の傳
○杉野十平次の傳
○俵星玄蕃武勇傳

義士傳第四編　岡島八十右衛門

○岡島八十右衛門の傳○岡島下郎直助忠義の條
○千馬三郎兵衛の傳○岡野金右衛門の傳

神田伯龍講演
丸山平次郎述記
講談義士傳　正編　全部十冊

●菊判形毎冊、紙數貳百頁已上
●木版手摺極彩色口繪入
●毎一冊正價金貳拾錢宛
●郵税金六錢●切手代用一割增

大野父子身の終りの條
○赤穂城明渡しの條

義士傳第五編　大高源吾

○中村勘助の傳　○大高源吾の傳
○賀井其角の傳　○堀部安兵衛の生立

義士傳第六編　堀部安兵衛

○堀部安兵衛の傳
○堀部彌兵衛の條

義士傳第七編　武林唯七

○武林唯七の傳　○武林唯七東下りの條
○小林武林の立合　○小山田庄左衛門の傳
○義士泉岳寺評定

義士傳第八編　赤垣源藏

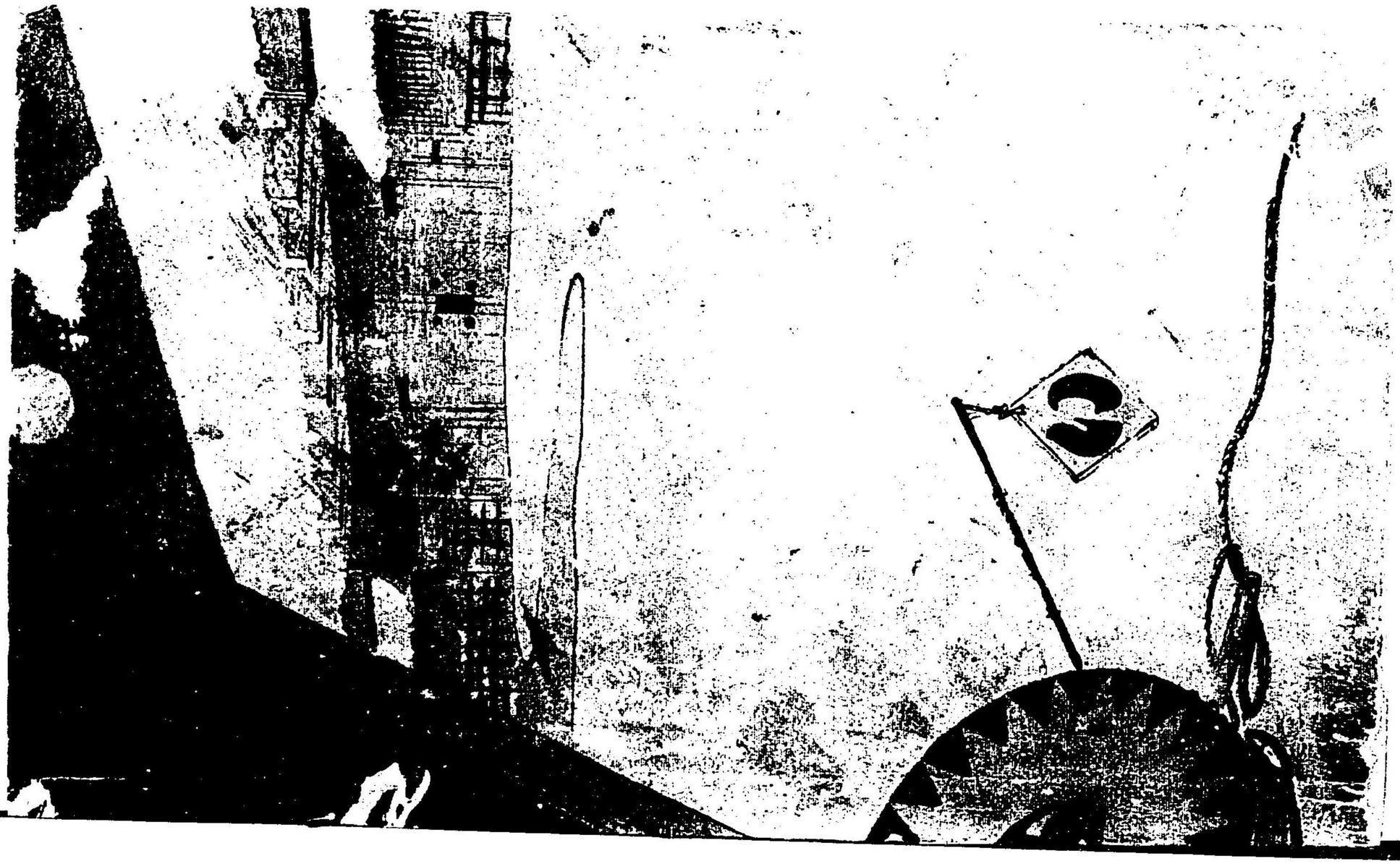
○赤垣源藏の傳　○勝田新左衛門の傳
○梅屋源助方に於て打入勢揃へ　○横川勘平の傳、
○義士打入の注進　○八百屋久兵衛の條

義士傳第九編　神崎與五郎

○神崎與五郎の傳下
○三村次郎左衛門の傳
○山岡の後家るいの傳
○前原伊助の傳
○矢頭右門七討入りの働き
○間十次郎の傳
○清水一角と大石良雄の勝負

義士傳第十編　大石良雄

○大石良雄の傳
○大石主税の傳
○後室ゆきの訣れ
○吉良上野介取の條
○義士泉岳寺へ引上げの條
△已上十冊を以て正編の一段落と致しまして獨續編と致し次回より出版致します


3

特9
97

096578-000-0

特9-97

大高源吾

神田　伯竜／講演

M36

DBS-0295